

1. 対象者の属性

- ・年齢
- ・性別
- ・職業の有無
- ・家族構成および同居の有無
- ・利用している医療機関の診療科
- ・利用している相談機関
- ・これまでの『こころの健康相談』相談回数

2. 『こころの健康相談』への来談の動機

- 1) 『こころの健康相談』の情報をどのように入手したか。
- 2) 『こころの健康相談』を利用しようと思った動機
- 3) 来談した当初、どのような悩みや健康問題を抱えていたか。

3. 『こころの健康相談』に期待したもの

- 1) はじめて来談したとき、『こころの健康相談』に何を期待したか。

4. 初回の相談時の印象

- 1) はじめて来談したとき、担当者の対応についてどのような印象を抱いたか。
- 2) 『こころの健康相談』への期待は、初回の相談によってどの程度満たされたか。

5. 来談の継続への動機・理由

- 1) 来談を続けたいと思った動機・理由はどのようなことか
- 2) 続けて来談したとき、何を期待したか

6. 相談によって得たもの

- 1) 初回の来談からの経過を振り返り、当初の悩みや健康問題はどのように変化、または改善したと思うか。
- 2) 『こころの健康相談』によって得たものは何か。
 - ・心身の病気や健康に関する専門知識
 - ・相談機関・医療機関・社会資源等に関する情報
 - ・自分自身の無意識の反応や行動への気づき
 - ・ストレスへの対処方法の学習
 - ・自分なりにやれていることへの評価(自己肯定感・自信)
 - ・相談できる人がいることによる安心感
 - ・その他()

7. 『こころの健康相談』への要望

- ・『こころの健康相談』に望むことや今後の期待

厚生労働科学研究研究費補助金

医療技術評価総合研究事業

ボランティア看護師の「兵庫県方式まちの保健室」活動が
来訪者に与えている効果と影響に関する研究

平成16年度 分担研究報告書

分担研究者 神崎 初美 兵庫県立大学地域ケア開発研究所 講師

平成17（2005）年 3月

ボランティア看護師の「兵庫県方式まちの保健室」活動が 来訪者に与えている効果と影響に関する研究

分担研究者 神崎 初美 兵庫県立大学地域ケア開発研究所 講師

研究要旨

ボランティア看護師が提供している「まちの保健室」活動を評価し大学の必要支援の方向性を明らかにする事を目的として、地域ケア開発研究所「まちの保健室」を定期的に来訪する地域住民を無作為で9人抽出し面接調査を実施した。調査は質的分析方法を選択し、「まちの保健室」活動が来訪者に与える影響と効果を分析した。結果、住民がまちの保健室に通う理由は、「健康に年をとりたい」であり、「健康状態に関して気になるヒストリーを持っている」「いま持っている健康行動を更に高めたい」「自己の実施している健康行動の確認のため」「理想の高齢者像に近づきたい」の4つのカテゴリーからなっていた。看護サービスの効果と影響に関しては「数字で示される事が意欲となり、努力の指標となっている」「指導を受け新しい発見を得る」「健康意識を行動に変容させるきっかけになる」効果があった。看護師の対応に望むことは「信頼できること」でありこれには「安心・安全・手際良さ」「親しみ深さ」が重要とされた。

A. 研究目的

兵庫県立大学看護学部と地域ケア開発研究所は、兵庫県看護協会が提供する「まちの保健室」事業活動を後方支援する立場にある。兵庫県看護協会は平成13年度から地域における看護提供システムとしてボランティア看護師による「まちの保健室」を3年間のモデル事業で開始した。その後、この企画は、住民への還元度と有益性が高いと県から評価され1年間の延長期間が設けられ現在に至っている。

今や県下全域の住民を対象とし活発に活動を拡大している「まちの保健室」であるが、この活動は来年度以降、看護協会主導から各地域支部による主体的活動へと移行することが決まっている。このため、これまで地道に拡大を続け取り組んできたこの事業は、地域住民への効果を評価せねばならない時期となっている。この評価は、「まちの保健室」が今後地域支部活動へと移行しても独自の機能を開拓し、更に住民のニーズに応える活動へと発展するために必要である。

一方、大学はこの「まちの保健室」活動を後方支援する立場をとってきた。従って、これまでの「まちの保健室」を客観的に評価し、効果的・発展的な活動方法を示唆する必要がある。

従って、ボランティア看護師が提供している「まちの保健室」活動を評価し大学の必要支援の方向性を明らかにする事を目的として、地域ケア開発研究所「まちの保健室」を定期的に来訪する地域住民に面接調査を実施した。調査は質的分析方法を選択し、「まちの保健室」活動が来訪者に与える影響と効果を分析した。

B. 研究方法

1. 半構成面接の実施

ボランティア看護師が提供している「まちの保健室」活動を評価するために、「まちの保健室」来所住民に半構成面接を実施し、活動が住民に与えている効果と影響を明らかにした。

2. 研究手順

- 1) 定期的に「まちの保健室」を来訪する地域住民の方々を無作為に選出し、面接調査への参加を依頼した。
- 2) 面接は、「まちの保健室」当日もしくは対象者の都合の良い日程で場所と時間を設定して実施した（面接場所は地域ケア開発研究所の個人相談室で実施）。
- 3) 面接は面接ガイド（以下（1）～（3））に従って実施した。
 - （1）「まちの保健室」のこれまでの看護サービス内容（看護相談や測定など）に関して感じていること、役立っていること、もしくは不十分であること、要望などなんでも思うことをお聞かせください。
 - （2）「まちの保健室」のボランティア看護師の対応や指導はいかがですか？この対応や指導はご自分の日頃の生活に影響していますか？何か具体的なエピソードなどがあればお話しください。
 - （3）まちの保健室に定期的に通っていらっしゃる理由はなんでしょうか？
- 4) 面接内容は、録音許可が得られる場合は録音した。
- 5) 録音した内容を逐語録し、分析は質的記述的に実施する。

3. 言葉の定義

まちの保健室：地域住民が身近な看護職に相談できる場と機能

健康行動：実際の、あるいは認識している健康状態に関わらず、健康の増進、予防、維持を目的として個人によってなされる活動

4. 研究協力者の選択

地域ケア開発研究所に来訪した地域住民から無作為に抽出した9人

5. 協力者への倫理的配慮

面接前には、研究の目的や内容を十分説明し、研究参加は自由参加であり、途中拒否が可能であることを伝え、同意が得られた協力者に対してのみ面接を実施した。研究協力を得ることで、大学は「まちの保健室」事業の充実と改善に役立て、研究対象者をはじめとする地域住民の方々により良い看護を還元できる等、研究することの利点を説明した。対象者は面接調査のために来所する必要があったが、調査は「まちの保健室」来訪時に実施し、対象者の都合を優先できるよう配慮した。また、身体的・肉体的疲労の有無を聞き体調にも配慮した。

面接はプライバシーが守られた個別相談室で実施し、面接の録音は研究目的と内容を説明したうえで承諾を得て実施した。録音に賛同の得られない場合に備え、匿

匿名保持のうえでフィールドノートへの記述許可を得る事を考慮した。また研究に関する問い合わせには研究のいつの時点においても応じられることをよく説明した。

対象者には研究への参加はあくまでも自由意志であり、いつの時点でも拒否できる権利がある事をよく説明した。研究に関して得たデータには匿名を保持し個人が特定できる内容の記載はしない事を説明した。

研究内容の発表時や論文掲載時に対象者の面接内容を引用する場合には許可を得るようにし、研究終了後一ヶ月以内には対象者から得た情報内容はすべて速やかに破棄することを伝えた。

以上の件に関して承諾書に明記し研究対象者に説明し承諾書を得た。また、分析過程においては、収集した情報内容は研究者のみが取り扱い、情報漏洩がないよう十分配慮した。

6. 調査期間：平成 17 年 1 月～3 月

7. 分析方法

面接を録音したテープから逐語録を作成したものをデータとし、分析には帰納的質的記述的方法を採択した。データは、面接内容である「まちの保健室に通う理由」「看護サービスの効果と影響」「看護者の対応」それぞれに分類しながら、文脈を損なわないように意味理解可能な最小単位の言葉を抽出していった。そして類似する内容ごとに分類しラベルを付けた。

C. 研究結果

1. ボランティア看護師の「まちの保健室」実践内容の実際

「ボランティア看護師による健康相談」は、兵庫県看護協会会員であるボランティア看護師が兵庫県立大学地域ケア開発研究所において活動している「まちの保健室」活動である。これは、大学教員の実施している「睡眠相談」とともに毎月第 1 金曜 13 時 30 分～15 時に研究所の集団相談室・ケア開発室を使用し実施している。活動は 3 年近く継続しており、血圧測定や健康相談等に加え、身長・体重・体脂肪・血管年齢測定・骨密度測定（超音波法による踵骨骨密度測定装置 CM-100）を実施してきたが、新研究所開設と共に動脈硬化度を非侵襲で測定できる新しい健康測定器具（商品名：form）を加え、機器による測定後の健康相談はさらに充実しつつある。

また同時に開催している兵庫県立大学教員による「睡眠相談」では、希望者に対して個別相談を実施しており、一度利用した住民に対して手紙や電話を活用した関わりを継続している。

最近では、『つどい会』という兵庫県下の地域住民ボランティアの協力を得て「まちの保健室」運営を効果的に実施している。『つどい会』は、平成 14 年度兵庫県立看護大学オープンカレッジ卒業生で発足し、健康への意識や学習意欲が非常に高い中高年の男女 24 名から構成されている。「ボランティア看護師によるまちの保健室」では 2005 年 3 月から、この『つどい会』のうちインストラクター資格を

もつメンバーによる簡単な体操療法も始めている。

2. 研究対象者の概要

対象者の平均年齢は 65.89 (±4.04) 歳、男性 1 名女性 8 名であった。全員がバスか自家用車等の交通手段を用いて自力で来訪していた。

3. 分析の結果

1) 住民がまちの保健室に通う理由：「健康に年をとりたい」

抽出した 4 つのカテゴリーを総称すると「健康に年をとりたい」であった。

住民がまちの保健室に通う理由に関して抽出された 4 カテゴリーは、「健康状態に関して気になるヒストリーを持っている」「いま持っている健康行動を更に高めたい」「自己の実施している健康行動の確認のため」「理想の高齢者像に近づきたい」であった。そして、これらは総称すると「健康に年をとりたい」という高齢者の想いであると判断された。「まちの保健室」に通い続ける理由にはこの想いが根底にあり、これが具体的健康行動を目指すモチベーションとなっていると考えられる。

*以下、斜線は面接時の住民の発言であり、() はそのときの研究者の問いかけ部分や説明の補足とする。

(1) 健康状態に関して気になるヒストリーを持っている

参加者の全員がこれまでの人生のなかで、健康状態に関して気になるヒストリー、すなわち、なんらかの健康状態の脆弱な部分の指摘を個人が重要視して来た結果、その部分を補充し解決させようとする具体的健康行動のひとつとして「まちの保健室」に来訪していた。

私は常に、まあ小さい頃から体が弱かったせいで、健康には人一倍気をつけているということで、たまたまこのまちの健康相談室があるということを知り、親戚から聞いて、それで隣の市からですが来ているんです。

(2) いま持っている健康行動を更に高めたい

参加者の多くがすでに運動療法や食事療法の実践をしており、健康に関する意識の高さを自負していた。そして自らの健康実践をさらに発展させるために「まちの保健室」に期待し訪れていた。

生活は週に 1 回ストレッチ体操とかフォークダンスが 1 時間、山行きが月 1 回ぐらいかな…歩くのはすごい歩いています。こういうのがあるとは、友達に聞いて。

日頃から自分の食べたものを記録したり、運動量も何をしたと書いたりするんですけど、そうするとやっぱりちょっと体脂肪が落ちるのは落ちるんです。

(3) 自己の実施している健康行動の確認のため

住民は、日々暮らしの中で自分の信じる健康増進行動と知識の確認のために「まちの保健室」を利用していることがわかった。従って、ボランティア看護師が既に住民が知り得ている知識程度しか提供できない場合は十分な期待に添えないことになる。

テレビ見たり、よくテレビ見るから。(健康に関する?) そうそう。友達ともよくしゃべるし。知っていることが多かったから確認できたっていう感じかな。

(4) 理想の高齢者像に近づきたいから

これまでの体験や環境から自らの目指す老後を描いており、語った住民の想いの内容は、その理想に近づくための健康行動を実践しようとしている発言であった。

娘二人おってもね。嫁いでしまってるから、むこうの人やから。今度私らが悪くなったときはほっとくわけにはいかん、看てくれるやろうとは思うけども、どこまでみってくれるか今の時代、子供は私らが育てただけけども、昔みたいに、そない看病とか、今はお金さえ出せば介護の付いたケアハウスいっぱいあるからいれられてしまうんちがうやろかと思ったりするし、お互いにお父さんとお互いに元気でよろなとって。だから常に健康に気をつけています。

年寄りを見てきていますので。言葉の暴力とストレスで。体には手はかからなかったんだけどね。自分が年寄り見てきてああいうことにならないように、とにかく今から気をつけてと思って。とにかく迷惑かけないように生きれたら最高だけどね。

2) 看護サービスの効果と影響

(1) 数字で示される事が意欲となり、努力の指標となっている

研究機器を使用した測定により住民達は身体の変化を数値の変化で知ること

になり自己の健康行動を評価でき、それが健康増進行動維持の説得力となっていた。住民は、示される数値によって日頃の生活状態を評価し、次回の測定までの指標とし、継続来訪の動機付けにもしていた。

やっぱりあの、こういうふうに出ると、やっぱりそれで自分の体調というか様子がね、それがチェックできるから、あつ、そしたら食事とかもうちょっと気をつけようとか、運動にしても運動しているつもりなんですけどね、あのーあつもうちょっととか……

(2) 指導を受け新しい発見を得る

看護相談に関しては、「指導を受け新しい発見を得る」など、看護師の細やかな指導による効果が得られていた。住民は相談指導内容の中から自分に身に覚えがあることを改善したり、新しい発見をしたりして、そのことが日常生活行動の改善への動機付けに生かされていた。

あのてきぱきと、説明もこう概要を分かりやすいように前はこうやったけど、今回はこうですよ。運動不足は、今は寒い言って冬籠りせんと首にマフラーでも巻いて歩くのが大事だから歩いてくださいよ。ってアドバイスして下さるから、あーそやなど。筋分やから今日から春やから明日から頑張らないかななどかと思つて。心には思いましたけど。

私この3ヶ月来たところ、血圧が高いんです。私いつも120いくつ。120ちょっとぐらいでしょ。でも140いくつとかね。だから睡眠不足とか疲労も影響しますっておっしゃったんでね。あー疲労ねと思つて、だからそれかなと思つて。でも、また来月ちょっと血圧を調べてもらおうと思つて。何もしない。こう、こういうところに来て結果を見なかったら、そのままいつてのを、それを見て。睡眠とかもね、あまりよく眠れないときとかもちょっと相談したりとか、何日間か測ってもらつて。テレビ消して電気も消して休んだほうがいいよとかいろいろ指導してもらつてね、そういうこともよかったかな。最近よく普通に眠れますし。

(3) 健康意識を行動に変容させるきっかけになる

また、看護相談では「健康意識を行動に変容させるきっかけになる」ことがわかった。すでに健康への関心は高い住民であっても具体的行動への変容は困難を極めるものである事が伺えた。だが看護相談では、看護者の示す具体的な提案は住民達への行動化への後押しの役割を果たすことが示唆できた。測定するだけでなく測定結果を今後改善させるための指導が住民の健康行動を具体化

させていた。以下は具体的食品を摂取するようになった住民の発言である。

やっぱり運動したり、食べ物に気をつけたり、牛乳なんか飲まんかったんですけど、牛乳やらチーズやらヨーグルトやら・・・一日一回朝だけですけどね。今まで全然食べなかったんですけど、それがこのたび（骨密度が）よくなった、あっ、やったーと思って

3) 看護師の対応に望むこと：信頼できること

看護師に望む対応に関しては「安心・安全・手際良さ」が重要である「親しみ深さ」の二つのカテゴリーを抽出した。これらを合わせ「信頼して貰える」ひとになることが必要であると総称した。

(1) 安心・安全・手際良さ

混雑していた日の「まちの保健室」に参加した住民の発言から、住民達はサービスを受けることに対して「安心・安全・手際良さ」を重視していることがわかった。

初めの入るときからね。もたもたもたもたしてたね。うちらも体操でいろんなところにね、お手伝いに行くんです。お年寄りの健康のあれに。行ってるときでもね。はじめから。私らそういうふうにごーしよ、あーしよ、いって作っていったからね。内容（看護相談の）はいいんとちがいますか。まだ慣れてないのか機械をね。もう一つ扱い方がちょっとね。なんかしてもらってても安心感がないのよね。

(2) 親しみ深さ

短時間のなかで住民が相談しようと思える看護師の対応としては、住民の発言からは、「親しみやすさ」「感じ良さ」がキーワードとなっていた。

好き勝手なことをようけ聞いてもらってるので、私はこれで十分。こちらのほうは十分ですけどね。もう、長いから皆さん顔を覚えてくださってるようですし。

4) まちの保健室に不足している活動：広報不足

殆どの住民が、友人から聞き「まちの保健室」の存在を知ったと発言し、広報不足を指摘していた。広報誌や地域への宣伝の必要性があることがわかった。

友達から聞いて来たんだけど、なんか一人の人はあれは〇×校区だけでしょって言う人があました。知らなかったわ。市政だよりでも知らないしね。

歩いてきたんですけどね 明石に住んで生まれてもう 60 年明石にいるんですけどね。こんなん知らなかったです。

D. 考察

1. まちの保健室の機能

「まちの保健室」は、現代社会背景のなかで増え続ける健康ニーズに対して、看護が果たすべく役割のひとつとして日本看護協会が実施したモデル事業である。気軽にだれでも看護職に相談できる場として、2000 年から各地で開始しはじめた「まちの保健室」事業もいまや全国に拡大している。兵庫県立大学看護学部と地域ケア開発研究所では大学教員が独自で実施する専門「まちの保健室」の看護相談実施と、兵庫県方式「まちの保健室」の後方支援という特色ある 2 つの取り組みを実施している。健全な住民が更に健康を維持するための兵庫県方式「まちの保健室」と、病院に行くほどではないが悩みを抱える住民が気軽に通える専門「まちの保健室」の両者が連携を取り合い実践を継続している。

2. まちの保健室に来る高齢者の持つ動機付け

本研究では、ボランティア看護師が実施する兵庫県方式「まちの保健室」活動が来訪者に与えている効果と影響に関して、後方支援の立場をとる大学教員が来訪住民を対象に実施した質的研究結果を考察する。

本研究対象者は平均年齢 65.89 歳、すべてが 60 歳以上の高齢者であり、面接調査結果による「まちの保健室」に通う理由を総合すると、「健康に年をとりたい」からであると判断された。だが、対象者達は単に健康に年をとりたいとだけ思っている高齢者達でなく、彼らには健康行動の具体的実践がありそれを更に増進させたいという動機付けが存在し、来訪行動に至っていた。さらに、彼らは、かつて健康に関して受けた何らかの指摘を問題視しており、健康でいる間にその問題を解決させようとする意志と行動が存在し来訪の動機付けとしていた。加齢に伴って身体機能が低下していくとき、自らが自覚している脆弱な部分が、より大きな衰弱の引き金になりやすい。「まちの保健室」への来訪は、高齢になっても病気にならず長寿を全うしたいと痛感している対象者達が、病気を病前の状態で早期に解決しようとする健全な行動の表れであり、「まちの保健室」はこの行動を支援しより引き出せる活動であることが明らかになった。そして、「まちの保健室」は現代の社会ニーズに沿った好ましい活動であるといえる。

また、「まちの保健室」来訪の目的のひとつはすでに実践している健康増進行動の確認作業のためでもあり、来訪してくる高齢者達にはかなり高い健康志向が存在していることがわかった。また、自らも理想の高齢者像を描いており、

それに向かうために必要な行動を模索するなど日頃の生活にも高い目標を掲げて生活していることがわかった。

本研究によって、在宅にいる高齢者の健康志向の強さと健康行動が浮き彫りになった。仕事を引退してから寿命を全うするまでが長くなり、元気な肉体的に「若い」高齢者が増え、高齢者の生活の仕方や考え方も確実に変化しつつあるといえる。だが、果たして本研究に参加したような健康意識の高い高齢者ばかりなのであろうか？戦後、60年を経て、経済状況や国民のライフスタイルは変化し、食生活の変化による生活習慣病の増加や病気の複雑化が起こっている。

「一般に、相談に来ない要援護者ほど深刻であると言われている。こうした場合、地域の自治会役員、民生委員、開業医などからの連絡がはいるシステムづくりが必要である。(西元, 1996)」という報告もある。兵庫県立大学明石キャンパスは、交通利便がよい地域とはいえないため、来所できる人々も限られている可能性がある。実際、本大学の「まちの保健室」の広報不足は本研究対象者からも指摘されていた。今後、更に広く様々な利用者を迎えることが出来る「まちの保健室」の発展を目指すには、育児相談その他の相談機能の充実、訪問活動や遠隔看護の実施、保健師との連携を深めるなど工夫を凝らした活動が必要となって来るであろう。

3. まちの保健室が果たしていた役割

本研究の対象者達はすでに自らヘルスプロモーションを実践している高齢者達であることが本研究結果から明らかになった。だが、看護相談を受けることに更に「新しい発見」が有りそのことが健康行動の実践に役立てられていた。一方、対象者達はTVや本から得た既知の情報や知識以上の専門職特有の看護相談内容を求めていることも明らかになった。看護相談は看護専門職が高度な専門知識を提供できることに特色がある。従って、看護相談指導を提供する看護者一人一人は、住民に還元できる専門的知識の質の高さを追求し日頃から精錬していく努力がこれからも必要であると考ええる。

一方、昨年中頃から「つどい会」メンバーによる「まちの保健室」運営の手助けが始まっている。このメンバーは兵庫県内広域から自らの意志でボランティアを買って出ている人たちである。殆どが壮年から高齢者で、ボランティアの理由には、「人の役に立ちたい」という者が殆どである。

「つどい会」の活動自体に住民同士の助け合いの姿があり、健全な人々が他の人を巻き込み健全な地域社会へ導くきっかけをつくることになる考える。

また、「つどい会」のメンバー達自身が「まちの保健室」運営への参加や来訪する高齢者達からの学ぶことの多さを実感しており有益な活動形態になりつつある。これこそ理想的な地域社会のなかの取り組みであり、看護は住民同士と住民の健康を繋ぐ役割を果たしているといえる。

4. ボランティア看護師に求められるもの

看護を提供するボランティア看護師に対して住民が求めていたものは、「安心・

安全・手際良さ」「親しみやすさ」であり、すなわち「信頼されること」であった。出会いの時から、住民は看護職者の技量を観察しており、自分の身を安心して任せられるかどうか確認していた。「信頼できる」と確認し、判断した場合にのみ、具体的相談に導入出来るのだと考えると、専門職者としての技量を磨く必要性は言うまでもない。また、「まちの保健室」では測定と看護相談を実施しているので測定時には手際よさ・的確さが求められる。「まちの保健室」事業は看護師が無償ボランティアで行っていることであっても住民には「技量ある専門職者」としての期待があり、住民の評価に答えられる看護師で有り続ける必要がある。

5. 研究の限界

本研究には様々な限界が存在した。本研究の対象者は9名と少数であったことで十分なデータが収集できたとは言い難い。また、「まちの保健室」に来院する高齢者は健康意識がより高い集団であった可能性もある。結果は、この対象者によって導き出されたものであり、従って一般化できるものではない。今後、より多くの住民の声を反映させた研究結果が必要であろう。また、「まちの保健室」が多くの住民の健康スクリーニング機能を果たすためには、来院しない住民に対する調査が必要であり、一般住民の健康観と動機付けに関する調査も必要だと考える。

6. 将来のまちの保健室

平成12年当初手探りではじまった「まちの保健室」活動も年を追って実績が蓄積され平成16年度には県下のボランティア看護師数が215名に昇り、実施箇所も今年度新たに125カ所創設され今後4年で500カ所になり益々活性化する予定である。「まちの保健室」はこれまで「地域住民が気軽に身近な看護職に相談できる場と機能」として実践活動を行ってきたが、「気軽」に「身近」と言う面ではさらなる努力が必要であり、今後もケア提供する側の整備が必要である。この「まちの保健室」事業は平成16年度には協会主導を終了し、その運営主体は各地区に任される新たな転機を迎える。そして、この主体の変化と今後予測される益々の多様化によって、これまでの機能とその在り方は再考せざるを得ない時期に至っている。この様な背景の中でこれまで各ボランティア看護師が個人の創意工夫で住民支援してきた活動を集約するためには今後はITを利用したネットワーク形成と整備を急ぐ必然性があり、その推進と発展のために大学に求められる役割は、学術的見地からの事業評価とEvidenceに基づいた継続的活動検証を行っていくことである。

E. 結論

住民が「まちの保健室」に通う理由は、「健康に年をとりたい」からであり、健康増進意欲と行動は既に高い対象者達であった。来院は日頃の行動の確認のためであったが、看護サービスに関しては「数字で示される事が意欲となり、努力の指標となっている」「指導を受け新しい発見を得る」「健康意識を行動に変容させるきっかけになる」と効果が示されていた。一方、「まちの保健室」広報活動不足が指摘され、看護師は「信頼できる」ことが重要である結果となった。

引用・参考文献

- 東ますみ, 川口孝泰, 南裕子: 遠隔看護システムにおけるバイタル情報の有用性「ま
ちの保健室」での活用に向けて, 兵庫県立看護大学紀要, 2002, 9, 103-111
- 東ますみ, 他: 兵庫県方式「まちな保健室」における A 地区住民のニーズに関する調査,
平成 14 年度「まちな保健室」事業経過報告書, 2003, 96-101
- 西元幸雄, 21 世紀・高齢者福祉の選択—豊かな老年期を創るために 豊かな長寿社会
を考える会, 第 6 章, p120, 中央法規出版.
- 南裕子: 看護の役割とその展望, 看護, 2003, 55(6), 75-80
- 南裕子: まちな保健室と看護活動, プライマリ・ケア, 2003, 25(4), 342-349
- 南裕子: 21 世紀における看護職の役割, 高知女子大学看護学会誌, 2002, 28(1), 4-7
- 南裕子: 看護管理 新しい時代に看護が果たす役割, 看護, 2001, 53(4), 135-144
- 吉田明子, 東ますみ, 他: 地域における看護活動の必要性とその課題 まちな保健室で
活動をしているボランティア看護師に対する調査から, 兵庫県立看護大学附置研究
所推進センター研究報告集, 2003, 1, 27-31
- ローレンス W. グリーン (著), マーシャル W. クロイター (著), 神馬 征峰: ヘルスプ
ロモーション—PRECEDE-PROCEED モデルによる活動の展開, 医学書院, 2000.

厚生労働科学研究研究費補助金

医療技術評価総合研究事業

「まちの保健室」が開催されていない地域住民への
健康ニーズ調査と地域住民ボランティア「つどいの会」の
方向性の検討

平成16年度 分担研究報告書

分担研究者 新井香奈子 兵庫県立大学看護学部在宅看護学 講師

平成17（2005）年 3月

「まちの保健室」が開催されていない地域住民への健康ニーズ調査と 地域住民ボランティア「つどいの会」の方向性の検討

分担研究者 新井香奈子 兵庫県立大学看護学部在宅看護学 講師

研究要旨

「まちの保健室」が開催されていない地区における地域住民の健康に関する意識や行動の実態から、兵庫県方式「まちの保健室」に対する要望を明らかにし、今後の「まちの保健室」、「出前・まちの保健室」のあり方の検討とともに、地域住民ボランティア「つどい会」の新たな活動の方向性の示唆を得た。調査対象者は、兵庫県在住の一般住民520名である（男性229名、女性258名、無回答が33名）。調査の結果、「まちの保健室」を知っている人（認知度）は、7.7%であった。また、性別に関係なく体重・体脂肪、体力維持の2つの項目に約40%の地域住民が高い関心を持っていることがわかった。さらに、健康のために何か実施していることがないと答えた地域住民はわずか9.0%であり、多くの住民が健康のために何かを実施し、複数の項目を実施している者も多数みられた。「まちの保健室」で実施してほしい内容として、骨密度測定、健康作りの体操、健康に関する教室、体重・体脂肪測定などの希望が多くみられた。これらは、年代や性別により希望が異なっていた。また、「まちの保健室」の〈開催曜日〉、〈開催場所〉、〈周知方法〉、〈開催内容〉などに関する意見を得ることができた。これら得られた結果を検討し、地域住民のニーズに応じた「まちの保健室」を開催して行く必要があると考えられた。その際に、地域住民ボランティアと一体となった活動方法を構築することも、地域住民のニーズ把握と「まちの保健室」の発展・転換に重要であろうと考える。

A. はじめに

「つどい会」が兵庫県立大学地域ケア開発研究所で実施している「ボランティア看護師による健康相談・睡眠相談」において、受付、体重・身長測定介助などに参加するようになってから1年が経過している。「つどい会」とは、平成14年度兵庫県立看護大学オープンカレッジ卒業生で自主的に発足した健康への意識や学習意欲、および常に自らの居住する地域で還元したいという欲求が非常に高い集団である。メンバーから「つどい会」として参加できる健康に関連した活動はないか、という提案を看護大学教員が受け検討した結果、1年前から「ボランティア看護師による健康相談・睡眠相談」に参加するようになったのである。

また、われわれ大学教員は、「つどい会」に対し、「つどい会まちの保健室」として3ヶ月毎に健康教育を実施している。最近では、メンバーから居住地域で「出前・まちの保健室」を実施したいという提案を受け、「つどい会」と共同で「出前・まちの保健室」を1回開催し、好評を得た。このような活動の経過を通じ、「つどい会」メンバーから、今後のまちの保健室における「つどい会」活動の拡大における可能性についての意見も多くきかれるようになり、活動のあり方を模索している時期でもある。

これまでの「まちの保健室」に関する研究は、「まちの保健室」に参加するボランテ

ィア看護師の満足度に関すること^{1),2)}、松尾ら³⁾による看護師の声かけ訪問実施の意義、近田ら⁴⁾の現職看護師の「まちの保健室」開拓における力量形成、吉田ら⁵⁾によるボランティア看護師の「まちの保健室」における研修ニーズ、などの看護師に関する内容が多く見られる。そのほか、住民に対する研究としては、既に「まちの保健室」に参加している住民を対象とした西村ら⁶⁾によるインタビューと個人票の記録をもとに分析した「まちの保健室」活動の評価、奥野ら⁷⁾によるボランティア看護師との関わりの中で自己の健康に関心を向けるプロセスに関する研究、また、「まちの保健室」を開催している阪神大震災復興住宅に居住する世帯主に対する東ら⁸⁾の質問紙調査があるが、「まちの保健室」が開催されていない地区住民に対する調査はみられない。

そこで、「まちの保健室」が開催されていない地区の地域住民がどのような健康ニーズを持ち、「まちの保健室」に対し何を求めているかを明らかにし、今後の「まちの保健室」、「出前・まちの保健室」のあり方の検討とともに、地域住民ボランティア「つどい会」の新たな活動の方向性の示唆を得る目的で本研究を行ったので報告する。

B. 研究目的

本研究の目的は、「まちの保健室」が開催されていない地区における地域住民の健康に関する意識や行動の実態から、兵庫県方式『まちの保健室』に対する要望を明らかにすることである。

C. 研究方法

1. 研究対象者：兵庫県在住の一般住民

2. 調査期間：平成16年6月から8月

3. 調査方法：自記式質問紙（無記名）による調査

4. 手順

- 1) 『つどい会まちの保健室』を実施している兵庫県立大学看護学部教員が『つどい会』メンバーの代表と協力し、自記式質問紙を作成する。
- 2) 『つどい会』メンバーに対し、兵庫県在住の一般住民に対する調査方法の全体説明を実施する。
- 3) 『つどい会』メンバー自身の旧知の地域団体や個人に対し、研究協力を口頭で依頼する。その際に、研究参加は自由であり、途中拒否が可能であること、同意が得られた場合にのみ調査用紙を回収することとする。
- 4) 研究協力者に自記式質問紙（無記名）を配布し、了承の得られた研究協力者から、後日記入済みの調査用紙の回収を行う。
- 5) 自記式質問紙の内容

年代・性別、自身の健康について、関心のある事柄について（選択式）、健康のために実施していること（記入式）、「まちの保健室」の認知度、「まちの保健室」の望むこと（選択式）、「まちの保健室」で実施して欲しい教室内容

(記入式) など

D. 結果

1. 研究協力者の人数と回収率

自記式質問紙（無記名）は、『つどい会』メンバー24名中の9名により、総数 561名に配布された。その内、同意を得た 520名から記入済みの質問紙を「つどい会」メンバーが直接回収した。回収率は、92.7%であった。

2. 研究協力者の性別と年齢

研究協力者 520名の性別は、男性 229名（44.04%）、女性 258名（49.62%）、無回答が 33名（6.34%）であった。図1に研究協力者の性別を示す。

10代、30代、60代を除き、女性の割合が高く見られた。年代別の男女比を図2に示す。

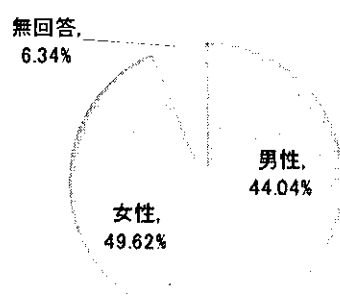


図1 研究協力者の性別

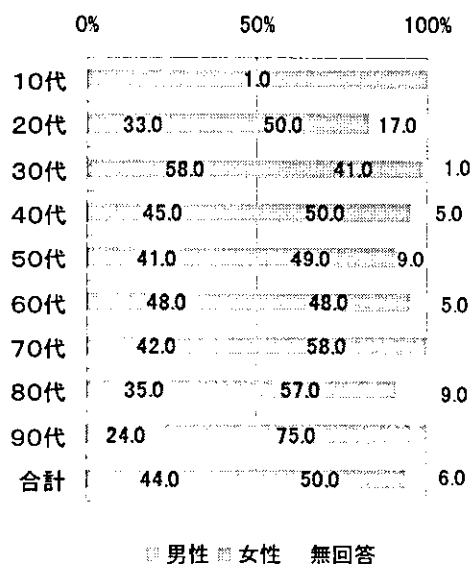


図2 年代別の男女比

研究協力者の性別と年代を表1に示す。50代が148名（28.5%）と最も多く、次に多いのは、60代（19.8%）であった。男性、女性ともに、40・50・60代の研究協力者が約60%、70・80・90代の研究協力者が16から20%みられた。

表1 研究協力者の性別と年代

年代 性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
男性	0	16	40	27	61	49	27	8	1	229 (100)
	0.0%	7.0%	17.5%	11.8%	26.6%	21.4%	11.8%	3.5%	0.4%	
女性	1	24	28	30	73	49	37	13	3	258 (100)
	0.4%	9.3%	10.9%	11.6%	28.3%	19.0%	14.3%	5.0%	1.2%	
無回答	0	8	1	3	14	5	0	2	0	33 (100)
	0.0%	24.2%	3.0%	9.1%	42.4%	15.2%	0.0%	6.1%	0.0%	
合計	1	48	69	60	148	103	64	23	4	520 (100)
	0.2%	9.2%	13.3%	11.5%	28.5%	19.8%	12.3%	4.4%	0.8%	

3. 自分の健康について何に関心があるか (複数回答)

1) 全体

自分の健康について訊ねた結果を図3に示す。全体では、体重・体脂肪 207名 (42.6%)、体力維持 201名 (41.3%)の2つの項目に高い関心を示した。その他の項目は、病気の予防 124名 (25.5%)、血圧 96名 (19.8%)、現在持っている病気のこと 91名 (18.6%)、関心なし 28名 (5.8%) という状況であった。

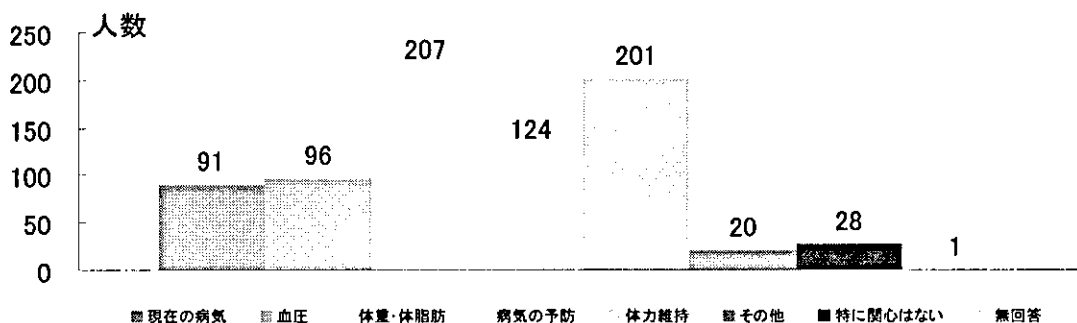


図3 自分の健康についての関心 複数回答 (全体 n=487)

2) 性別

自分の健康についての関心を性別で検討した結果を図4に示す。男性は、体力維持

87名(38.2%)と最も高く、ついで体重・体脂肪 80名(35.1%)であった。女性は、体重・体脂肪127名(49.4%)が最も高く、ついで体力維持 114名(44.2%)であった。

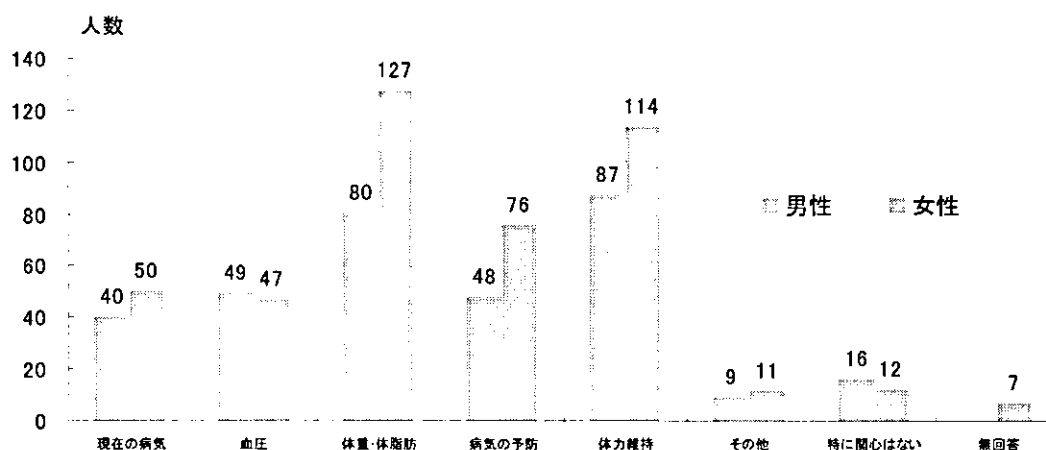


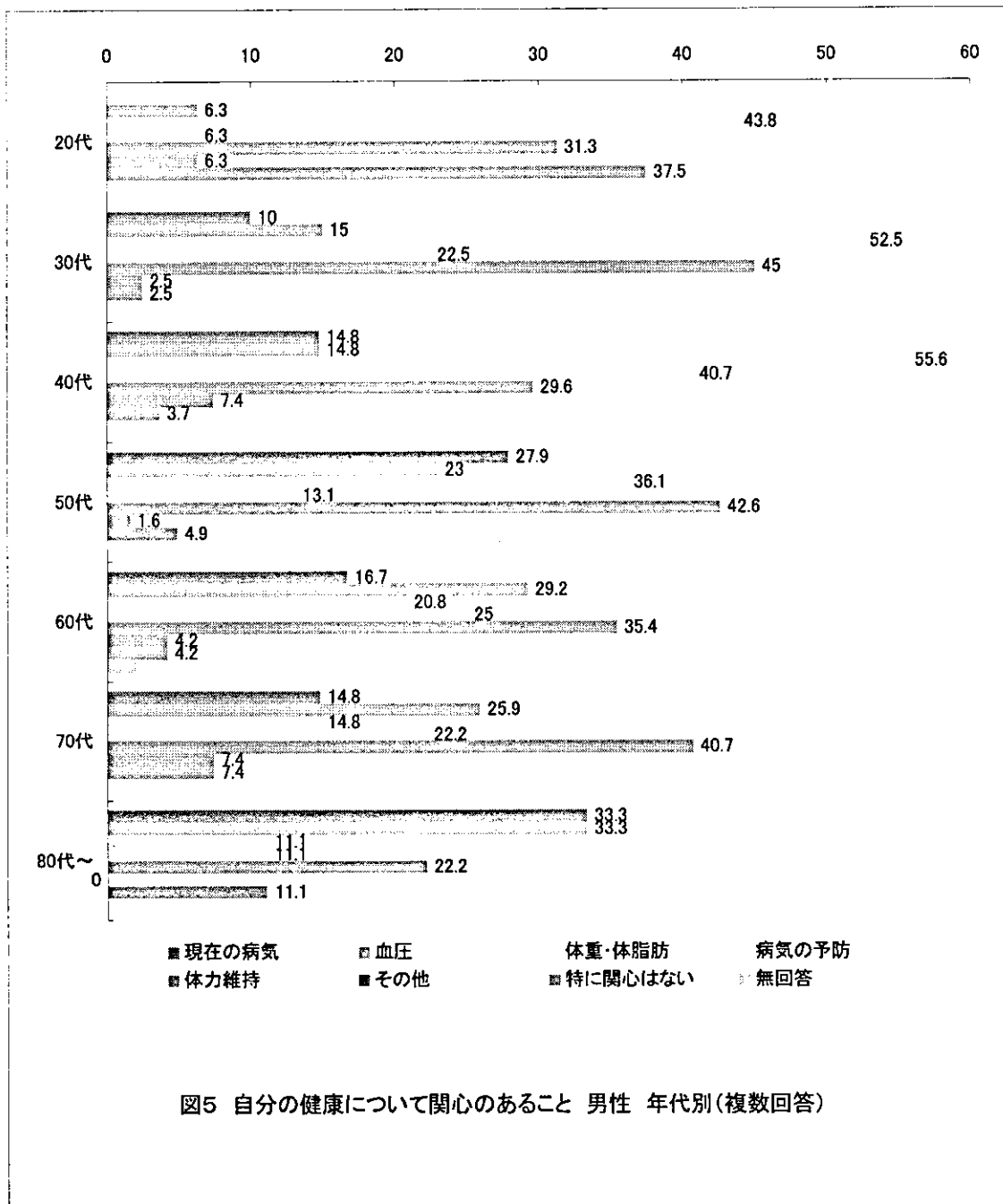
図4 自分の健康についての関心 複数回答 性別

3) 年代別

自分の健康についての関心を年代別にみた結果を図5・6に示す。

男性は、20代から40代まで、体重・体脂肪に関心のある人が多くみられるが、50代から70代までは、体力維持に関心のある人が多くみられた。80代以上の男性の関心は、現在の病気や血圧への関心がどちらも33.3%と高くみられた。また、病気の予防への関心は、40代で高かった。

女性は、10代から60代まで、体重・体脂肪に対する関心が最も高くみられた。40台以降、体力維持にも関心が高くみられた。男性と同様80代以降の女性は、血圧に関心のある人の割合が多くみられた。



4) その他に記載された健康についての関心

その他の自由記載に記載された関心のある事柄を以下に示す。

胃腸、歯の健康、老化、アレルギー、健康のために良いこと、栄養のバランス、腰痛、心臓、手足のだるさ、血液さらさら、コレステロール、ボケについて、健康と食事と運動との関係、下肢静脈瘤など、さまざまな関心ごとが記載されていた。